留萌市史……⑭

築港運動で留萌 増毛が鎬(しのぎ)を削る

期成会を組織し積極的陳情

明治三十三年九月、初めて留萌築港鉄道期成同盟会なるものを組織し、時の料亭桃開楼において発会式をあげ、実行委員として山本仁三郎、五十嵐綱治、中川宇作、藤田隆造、鳥海直隆、坂内深七、三田村千瓢があたり、同年の帝国議会に鉄道敷設、港湾修築を請願した。

また、時の道長官園田安賢も本港に対して非常に力を注ぎ、よくその指導方針を村民に徹底させ激励した。

また園田長官は留萌港を含めた全道十四港に対して、拓殖十ケ年計画にこれを入れようとしたが、築港の準備期間として事業を予定したに過ぎなかった。

しかし、人口が千人をこえ増加するにしたがって、住民意欲の高揚はますます高まり、時の政党政派をこえて、文字通り挙町一致し陳情の手をゆるめなかった。

明治三十五年になると、内務次官山県伊三郎らが築港、鉄道関係の立地状況を視察調査したことがある。

このことは政府や道庁としても具体的計画樹立の必要が迫ってきたことを意味する。

当時民間としては村田熊吉が村田回漕店を開き、対馬園江が大和田町附近の炭砿採掘のかたわらに対馬回漕店の看板をあげた。

その後まもなく鳥海直隆、古坂梅吉らが共同で留萌倉庫を開設、港北（元町）に石造の倉庫十棟ほどを建てた。同時に林乙吉も個人で倉庫業を始めた。留萌の港運業草分けとして佐藤解舟部、瀬川解舟部が仕事を始めたのもこの時期である。

春先には各地から来る鰊漁船の他に漁場用のわら工品や漁網などを満載した商船が河口に入ってきた。また、大和田の錦旗炭砿が年間一万トンの石炭を掘り石炭の積み取り船も出入りするようになった。

石炭は馬車鉄道で河口（現在の市営第二上屋）に送り出され、それから解に積みかえられて河口外に停泊中の船へと運ばれる。

留苇川は明治八年以来、今の給水所前から港北（元町）に橋がかけられていたため、船はこの橋より上流に入ることができなかった鰊漁期にはこの橋まで、和船や帆船でうまり、倉庫もまた充満したといわれる。

増毛との競願

明治三十三年の築港鉄道期成同盟会が結成されて強力な運動が展開されるころから、隣接の増毛が築港運動にのり出し、烈しい争いとなった。

当時、増毛は支庁所在地であり行政的、経済的にも留萌より優位な地にあった。港湾も形態をなしており、この増毛築港運動は留萌の有志たちに大きな脅威を感じさた。

たまたま天塩沿岸を測量にきた海軍水路部の測量艦「武蔵艦」の艦長を説得し①増毛は気候温暖で港内は波静かであり、留萌は風が強く寒暖の差が激しい②増毛の海岸線は自然の湾形を作っているが留萌は河口を利用しているだけ③増毛の海底は深浅の差が少ないが留萌は岩礁などで危険、という説明書を書いてもらったという話も出てきた。

確実な理由書を添え、反撃に出られた留萌は顔色を失ってしまった。

この争いは相当長期にわたったまた、貴族院においても問題が論議され、明治四十年、時の内務大臣原敬が増毛と留萌に実態調査を決行するという事態も生じた。

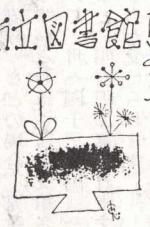
留萌港が全額国費で着工と決ったのは明治四十二年、その翌年の四月から工事が開始された。

一方、同時に運動を進めてきた留萌～深川間の鉄道敷設問題も、速やかに実を結び、明治四十三年十一月に開通した。

この増毛との争いに最後まで尽したのは五十嵐優太郎であり、論理的立証で議決を得たのは工学博士広井　勇であった。

明治四十三年、道庁は十五ケ年の第一期拓殖計画事業の中に、留萌港の修築を織りこんだ。メーク調査を行なってから、すでに二十三年の歳月が流れていた。

広井　勇博士



■文学・小説

正雪記　山本周五郎／人に我与うる哀歌　大西赤人／星と魚の恋物語　曽野綾子／藍より青く　山田太一／戦士は傷つきながら眠るなかにし礼／青春の門　五十寛之／はにわの子たち　畑山博／真夜中すぎでなく　デュ・モーリア／流れゆく日々　石川達三／南十字星共和国　ブリューソフ／死は我職業　メルル

■一般教養・実務

７３年朝日年鑑／毎日年鑑／小さい仲間の劇あそび　日本演劇教育連盟／幼児の遊びと学習　篠崎徳太郎／おばあちゃんの知恵　戸野村　操／素粒子とは何か　Ｍゲルマン／幼児の性格診断　品川不二郎

■４月の休館日

各日曜日・８日・１５日・２０日・２９日・３０日は館内整理のため休館いたします。

なお開館時間は、月曜日から金曜日まで午前10時から午後５時、土曜日は午前10時から正午までです。

昭和48年3月号／編集・発行　留萌市企画室／印刷　留萌印刷株式会社